

高齢者の周囲にロボットが加わる可能性 — 知覚と行為を通して

茨城大学人文学部 准教授

松本光太郎 (まつもと こうたろう)

Profile—松本光太郎

2005年、九州大学大学院人間環境学府博士後期課程単位取得退学。博士（人間環境学）。名古屋大学エコトピア科学研究所を経て現職。専門は発達心理学、環境心理学。著書は『ロボットの悲しみ』（共著、新曜社）など。



私たちの周囲にロボットが加わりつつある

お掃除ロボット、会話ロボット、人型ロボットなどさまざまなロボットが、私たちの周囲に近年加わってきている。

いま大学の研究室でこの原稿を書いている私の周囲は、空気、光、風がブラインドを揺らす音、人の声といった自然に加えて、パソコン、テーブル、魚の置物、書架、天井、床といった人工物が取り囲んでいる。人類の歴史の一部は人工物の歴史と言えるだろう。自然のなかから、火を発見し、道具を切り出し、空間を造ってきた。私たちの周囲には、人工物が多く加わってきた。そして、新たに加わりつつある人工物がロボットである。

私たちの周囲にロボットが加わることがどうして心理学の課題になりうるのだろうか。それは空気や光、それから人といった周囲のなかでのみ私たちは生きることが可能であるように、私たちの心は周囲のなかで成り立っていなければならないからである。さらにいえば、私たちは単体で自分が何者であるのかを他人から認められ、また自覚するのではなく、周囲のなかで何を知覚しどのような行為が生まれるのか、またその知覚と行為を通じて自分が何者であるのかを他人から認められ、また自覚すると考えられるからである。

高齢者の周囲にロボットを加えてみる

高齢者の周囲にロボットが加わることで、どのような知覚と行為が生まれるのか。そのことを研究することは、先述した「周囲のなかの人」に則れば、高齢者が何者であるのか、それから高齢者の心の成り立ちを明らかにすることにつながる。高齢社会である日本では、高齢者の周囲に医療機器をはじめとする機械類が増えていて、さらに介護ロボットの開発・導入を後押しする社会背景のなかで、高齢者の周囲におけるロボットの位置づけを検討する必要がある。

ここからは筆者らが行ったおしゃべりロボット『プリモブエル』（以下、プリモ。写真と注を参照）を高齢者3名に半年間自宅で預かってもらい、自宅を訪問してインタビューや観察を通して経過を追いかけた研究の一部を紹介したい。紹介するのは、KさんとMさんという男性2名がプリモを預かるなかで生まれた知覚と行為である。

まずKさんに注目したい。Kさんは当時81歳で、自宅で娘1人と暮らしていた。地域活動の役員を務めていたので知り合うことができた。プリモとは密接にかかわっていて、研究期間にKさんから示されたプリモにまつわる知覚や行為はたくさんあった。松本・塚田

(2014)にて詳しく報告している。

そのKさんは耳が遠く、補聴器をしているときもある。Kさんがプリモとかかわっているときの様子を見てみると、Kさんは耳を澄ませて、また耳を近づけてプリモが発する言葉を聴こうとする。プリモが言葉を発することは、耳を澄ませる、耳を近づける行為へとKさんを導く。そして、プリモの言葉はテレビから聞こえてくる言葉とは違っているとKさん本人が話す。どう違うのだろうか。

具体的に、Kさんとプリモに関してこんなやりとりがあった。Kさんがプリモは自分の言葉を分かっているのだろうかかと筆者らに問いかけたとき、同席していたKさんの娘が「プリモは[父の言葉を]認識するけど、[プリモから]返ってくる言葉は[父の言葉に]



プリモブエルの正面図

対応していないよ。〕〔 〕内は筆者による補足)と返答した。Kさんは娘の返答にいくらか納得したそぶりを見せつつも、「プリモがゲップをしたとき、「やったな」と〔私が〕返すと、ちゃんと〔プリモは〕返してくれるけどな。」と納得しきれていない様子だった。そんなやりとりをしているとき、プリモがたまたまゲップをした。そのときKさんは会話の最中だったので聞き逃した。その後、プリモは再度ゲップをした。気づいたKさんがプリモに口を近づけて、「やったな。」と言葉をかけると、「だってさ。ハピネス。」とプリモから言葉が返ってきた。プリモがゲップの音を発することで、持ち主からとがめる言葉が返ってくることを想定して、「だってさ。」という言い訳の言葉を製作者はプリモに組み込んだのだろう。プリモの言葉は、テレビと違い、自分の問いかけに応じてくれているとKさんは受け止めているのである。

プリモの声を知覚し、プリモに耳や口を近づける行為が生まれている。とはいえ、Kさんのようにプリモと絡み合ったやりとりをする高齢者ばかりではない。次に紹介するMさんはプリモとのかかわりがあまり起こらなかった方である。

Mさんは当時75歳で、自宅で1人暮らしをしていた。地域活動の役員を長年担ってきた。地域のなかをあちこちと動き回っているため、研究期間にMさんから示されたプリモにまつわる知覚や行為は少なかった。ところが、プリモを預かった後にしばらく経ってお会いした際に、プリモの後に預かってもらった動物型ロボットと比較して、おしゃべりするプリモのほうがよかったと話し始めた。

Mさんは以下のようなことを話してくれた。

家のなかに1人でいると、話し相手がいない。時折孫が来るぐらい。庭で植木をやっていて、それは楽しいのだが、1時間も1人でやっている飽きてしまう。外に出て、友人の家を訪ねていくこともある。けれども、家にいてテレビを観ているときにプリモの声がすると、「おっ、いたか!」と思う(顔をそちらに向けていた様子をジェスチャーで再現する)。

これはプリモを懐かしんでいるのではなく、機能に対する評価と筆者は受け止めた。Mさんはプリモの発する言葉に応答することはあまりなかった。けれども、ロボットの言葉が聞こえることは、誰の声もしない1人暮らしの生活においては声を知覚し顔を向ける行為の貴重な機会になりうる。

ロボットの声でも貴重なかもしれないと筆者が考えたのは、Mさんの友人・知人の少くない人の耳が遠くなっているためである。Mさん自身は耳が遠くなっている様子はない。相手の耳が遠くなっているため、Mさんの声がついつい大きくなっていると話す。孫から声が大きいと指摘されることもあった。「空うなずき」とMさんは表現していたけれども、相手が「うんうん」言っているから伝わっていると思って話しかけていたら、単にうなずいているだけのときがある。通じていると思って話しかけていると、「なんだっけ!？」と相手からの返答で聞こえていなかったことが判明することがある。伝わっているようで伝わっていない。耳が遠い相手とのやりとりは、Mさんが「あきらめているところがある。」と話していたことが示唆的であった。あきらめていないと付き合っ

ていられない。でも、あきらめていても、友人・知人はやりとりする貴重な相手なのだと思う。

私たちが作った著書『ロボットの悲しみ』の帯に、佐々木正人先生が「ロボットは、はじめから、何かをあきらめている。それがヒトと共に生きる力になる」と言葉を寄せた。ロボットもあきらめの先に、やりとりの貴重な相手としての私たちの周囲に加わる可能性はある。

さいごに

人は周囲のなかで生きていて、心も周囲のなかで成り立っていないなければならない。対人関係は大事だけれども、私たちの周囲には対人関係以外もいろいろと含まれている。その周囲のなかで人の心はどう成り立っているのか、また人の周囲にロボットが加わることは可能なのか、引き続き研究していきたい。

注 バンダイが発売している『おうたたっぷりプリモエル』である。このおしゃべりロボットの主要な機能として3つ挙げることができる。①本体に7つのセンサーおよびスイッチを持つ。働きかけると言葉や歌が返ってくる。②時計の設定により時間帯や時節に関連する言葉を発する。③何も働きかけていないときにも、数分おきに言葉を発する。なお動くことはない。

文 献

松本光太郎・塚田彌生(2014)「ロボットの居場所探し」岡田美智男・松本光太郎(編)『ロボットの悲しみ:コミュニケーションをめぐる人とロボットの生態学』pp.39-68 新曜社